

留学生と地域高校生の異文化間能力育成における異文化間インタラクション

— 「関り」が生まれる空間とその文化継承 —

広島大学森戸国際高等教育学院 恒松直美

はじめに

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域学校の高校生の異文化間能力育成を目的として実施した国際教育交流に焦点をあて、留学生と高校生との異文化間インタラクションと関わりについて考察する。留学生と高校生の国際教育交流に関わり、意義ある異文化体験の場の構築を目指し様々な方策を試みてきた。本稿では、対面・オンライン・ハイブリッドの様々な方式で留学生と高校生の国際教育交流を企画・実行した体験に基づき、留学生と高校生との異文化間インタラクションや関りが生まれる空間について参与観察と生徒へのアンケート調査をもとに分析する。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）により、留学生の国際移動は大きく制限され、留学や国際教育の在り方は大きな影響を受けた。日本の大学に留学を希望する留学生の留学計画は入国制限により不透明な状況が継続した。ICTの有効活用によりオンライン教育を実施する必要性が生まれたことで、筆者は海外在住の学生と日本在住の学生がオンライン・ハイブリッド形式で同時受講する授業を実施することとなった。また、2020年からの3年間、対面・オンライン・ハイブリッドの3つの形式による国際教育交流を体験することとなった。2020年度まで、「留学」はホスト国に移動して現地で生活するものであり、「国際教育交流」は、ホスト国の地域学校や地域住民との対面で実施するものと想定されてきた。その大きな転換を体験した。従来の「留学」の定義と形式が変容する中、留学の主要目的であるホスト国での異文化体験はバーチャルで代替可能であるのか、異文化間インタラクションにおける対面とオンラインの相違は何かについて考察する機会を持った。

本研究では、2014年度より広島県立日彰館高等学校において開催してきた広島県立日彰館高等学校と広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）¹留学生・広島大学学生との「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流会と異文化間能力育成研修の授業に焦点をあて、留学生と高校生の異文化間インタラクションを起こす場として筆者が創り出してきた場を“third Culture”として捉えつつ(恒松 2021)、異文化間の関りを考察する。筆者は、国際教育交流の司会・進行を担当し、留学生と高校生の双方から相互の文化への興味を喚起するとともに、英語と日本語により双方からのコミュニケーションを引き出しつつ、共感の場となる“third culture”を作ってきた。パンデミック下においてニュー・ノーマルへの対応が必要となる状況下での新しい教育方式による交換留学生と高校生の国際教育交流の体験をもとに、異文化間接触のあり方について考察し、今後の新しい異文化間能力育成の教育の方向性を探る。

¹ 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。広島大学は、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの31か国の97大学及びUSAC (University Studies Abroad Consortium)とUMAP (University Mobility in Asia and Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結し、これまで945名が参加している(2022年5月時点)。HUSA プログラムは1996より開始され、毎年約40~60名の留学生が「HUSA プログラム交換留学生」として広島大学に1年間または1学期留学している。

グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流の新たな発展

広島県立日彰館高等学校が取り組んできたグローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」に、筆者が企画・実行する国際教育交流を導入したのは2015年に遡る。以来、2019年度まで毎年対面で本国際教育交流を継続して開催した。2020年度は、新型コロナ禍により、対面で実施していた国際教育交流を中止にするか、またはオンラインによる新たな方式を導入して実施するかを選択を迫られる転換点となった。新しい挑戦となる「オンライン国際教育交流」や対面とオンラインを併用するハイブリッド形式も想定した新しい方式の国際教育交流の取り組みを開始した。

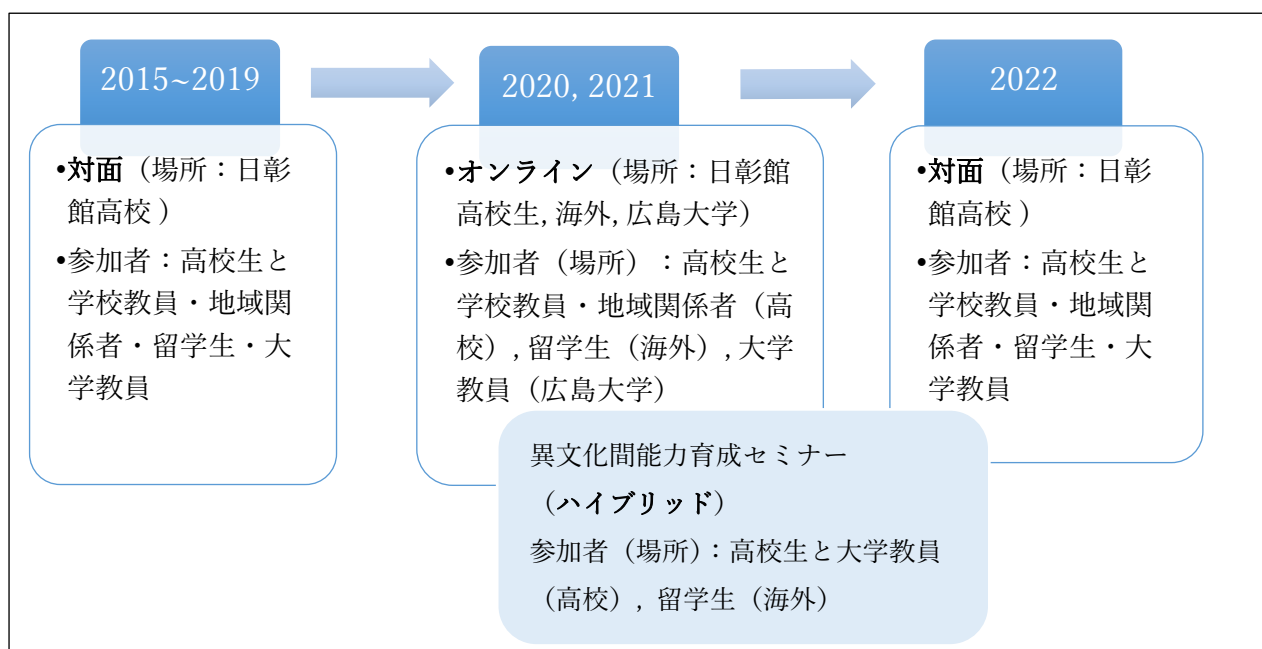


図1. 国際教育交流と異文化間能力育成セミナーの形式

2015年から2022年までの国際教育交流の形式を図1に示した。日彰館高等学校のグローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」は、地域・日本文化の紹介等を通して高校生が留学生におもてなしをすることを目的とし2014年に開始された。2015年度より筆者が全体行事の一部に国際教育交流を企画して導入し、2022年度で8回目を迎えた。国際教育交流の企画において、英語と日本語で司会進行することにより、言語能力に関わらず、参加者全員が異文化間能力育成の場に参加できるよう目指してきた。2020年度の国際教育交流は、コロナ禍により対面での開催は困難となり、オンラインで開催することが決定された。2021年度は「令和3年度吉舎おもてなしプラン 縁～つなぐ・つながる田舎主義～」をテーマとし、2020年度に続く2回目のオンライン国際教育交流会となった。広島大学からの参加者は、筆者の授業“Glocal Internship”（「グローバル・インターンシップ」）と”Japanese Society and Gender Issues”（「日本社会とジェンダー」）の受講生がフィールドワークとして参加した。2020年度・2021年度は、日本への入国を海外で待っている状況にある留学生と既に入国している留学生とが存在した。海外で待機する留学生は、入国時期が不確定の状況で、自国の大学の授業履修や課外活動の調整など様々な決断を下さなければならない状況にあった。2020年度・2021年度とも、高校生は現地の教室からオンラインで参加し、大学教員も広島大学の研究室からオンラインで司会進行を行うことで、

地域高校生・大学教員・海外の留学生をオンラインで連携し国際教育交流を実現させた。

対面で一か所に集まる国際教育交流と異なり、オンラインの場合、画面に写っている姿しか見えないため、各留学生が画一的な状況におかれているとの錯覚を持ちやすい。しかし、実際は、参加している各留学生は個々の特殊な状況に置かれ各自異なる国や場所から参加していた。海外の協定大学に所属する交換留学生は、広島大学の授業を海外からオンラインで履修する状況にあり、通常の大学生活とは異なる生活を余儀なくされていた。第1に日本と自国との時差である。ヨーロッパの学生の場合、就寝時間から早朝にかけての時間が日本の大学の授業時間となる。第2に、自国の大学の授業を履修していないため、大学から遠方の自宅に帰宅している学生も多く、自国の大学への所属感がないため孤独に陥りやすい。自国の大学の授業での関係構築などもなく、日本の授業時間に対応して昼夜が逆転している場合、日中の時間は有効活用ができない。これらの困難な状況におかれ海外で待機する留学生にはケアが必要であり、日本の人々と関わることでできる国際教育交流は大きな意味を持つ。2021年11月の国際教育交流に引き続き、2022年3月には、異文化間接触の第一歩を踏み出した高校生の異文化間能力育成を目指し、対面とオンラインを組み合わせた**ハイブリッド形式**による異文化間能力育成研修を実施した（上記写真参照）。筆者は高校を訪問して対面で授業を行い、海外在住の留学生がオンラインで参加する形式である。本研修は、日本に滞在している高校生が、海外の留学生がオンラインで参加する大学教員による授業を受講する斬新な体験となった。



「異文化間能力育成研修」(2022年3月)

2022年度の国際教育交流は3年ぶりに対面で開催した。筆者の授業“Glocal Internship”(「グローバル・インターンシップ」)と“Japanese Society and Gender Issues”(「日本社会とジェンダー」)の受講生が各授業のフィールドワークとして日彰館高等学校を訪問した。広島大学からは、イギリス・フィンランド・アメリカ・スペイン・ドイツ・中国・台湾・香港・韓国・日本からの参加者が対面で参加することとなった。² 留学生を含む広島大学学生36名、日彰館高等学校生徒147名、三次市吉舎中学校1年生9名、吉舎中学校長、同窓会事務局長(ホストファミリー経験者)、教職員17名の計211名が参加した。さらに、53名の学生が、安全の観点から学校内でオンラインで全体会と吉舎街歩きガイドツアーに参加した。2022年度の国際教育交流会・異文化間能力育成研修のスケジュールを表1に示し、国際教育交流会の全体会の内容を表2に示した。全学年が参加した全体会では高校生5~6人で構成する18グループが待つ会場に広島大学からの参加者が入場した。大学のコロナ感染対策に加え、高校からも感染対策ガイドラインの提示があり、遵守して実行した。高校生はオンラインによる全体会への参加も可能とし、教室で中継を観察した。対面については保護者の承諾を得た。世界各国の留学生を含む約200名の前で発言は高校生が躊躇する現状を考慮し、2018年にグループワークを導入し発展させてきた。高校生6~7人と留学生2~3人の少人数のグループを構成することで、高校生と留学生とが話しやすくなる環境を作った。グループ内のインタラクションの内容を筆者が全体場で紹介し質疑応答することで、全体で情報を共有しつつ、高校生が留学生とよりアクティブに関われる場を構築してきた。

² グローカル人材育成プログラム120「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流の発展については、恒松(2020)参照。

留学生と高校生の異文化間インタラクション：アンケート調査と参与観察

2022年度の吉舎おもてなしプランの目標は、「多様性を認め合い、自分と他者の心理的距離感を縮めようとする」である。事後アンケートを高校生に実施し、「全体会」・「クラス交流」・「街歩きガイドツアー」の場面別に対面とオンライン参加の参加者に感想を聞いた。目標達成度・改善点・大学生へのメッセージについても尋ねた。本アンケート調査と参与観察をもとに留学生と高校生の異文化間インタラクションについて考察する。

表 1. 2022 年度 国際教育交流会・異文化間能力育成研修のスケジュール (2022 年 10 月 29 日)

10:30	日彰館高校到着 Arrival at Nisshokan HighSchool	
11:00-11:45	全体会（体育館） InternationalExchange (All School)	
12:00-12:50	クラス交流（各 HR 教室） Classroom Activity	
12:50-13:35	昼休憩（多目的教室） Lunch Break	
13:40-15:10	吉舎街歩きガイドツアー Guide Tour in Kisa	
15:20-15:40	お別れ式 Farewell Ceremony	
16:00	出発 Departure	

表 2. 国際教育交流会(全体会)の内容

11:00-11:10	留学生による自己紹介 (5 分) * International Students' Speech – 2 students	
11:10	グループアクティビティ (全体) (35 分) Group Activity	
(1)	グループ内で自己紹介 (10 分) [11:10-11:20] Self Introduction in Each Group	
(2)	留学生・高校生に関する質問 (10 分) [11:20-11:30] Questions to Students	
(3)	絵カードを使用したクイズ (10 分) [11:30-11:40] Quizzes – Using Pictures	
(4)	高校生からクイズ (5 分：3~5 問) [11:40-11:45] Quiz - High School Students	

「全体会」における「留学生による自己紹介」では、留学生 2 人（スペイン・ドイツ出身）が英語と日本語で自己紹介スピーチを行った。スピーチ後、「専攻は何ですか」、「日本で何をしたいと言っていますか」などの質問を高校生にした。高校生が英語を聞き取れていなかった場合は、再度、留学生に問いかけてもらうことで双方が関り合えるようにした。筆者が日本語と英語の両言語で双方をつなぐことにより、高校生と留学生とのコミュニケーションが生まれるようにした。「グループ内で自己紹介」では、留学生が各グループの中に入り、各グループで自己紹介を行い、国、出身大学、専攻、趣味について質問し合った。その後、全体の時間を数分持ち、各グループでの自己紹介の内容について筆者が質疑応答を行い、グループのメンバーを紹介する場を作った。「留学生・高校生に関する質問」で

は、「日本以外の国に留学したことがある人がいるグループは立ってください」、「グループの中に英語と日本語以外の言語が話せる人がいるグループは立ってください」の質問をし、グループ内でのインタラクションを起こしつつ、それを全体に提示し共有した。「絵カードを使用したクイズ」では、お好み焼きなどの絵をスクリーンで提示し、日本文化や地域の特産物を高校生が留学生に説明する挑戦をした。「高校生からクイズ」では、「日本でどこに行ってみたいですか」などの質問を用意し質問した。

アンケート調査では、「直接触れ合うことでとても達成感があった」、「積極的に留学生と話すことができた」、「その人の国について実際に経験したことを教えてもらえて楽しかった」など、対面による留学生との直接のコミュニケーションを高く評価する意見があった。また、「先生がいろいろな班の人に質問していて活動的だった」、「言葉が分からなくてもジェスチャーで伝えられたり、インターナショナルってこういうことなんだというのをすごく実感できた」、「大学の先生が用意してくださったレクリエーションがすごく楽しかった」、「T先生が、どの言語でもいいですよとおっしゃられていて、様々な国がいて、様々な人たちと交流しているんだと直に感じることで、新鮮な気持ちとわくわくした気持ちになった」から、大学教員が実践した留学生と関わる体験を楽しむ姿が伺える。「日本のものを簡単な英語に直す時、班の人もだけと留学生の人と一緒に考えてくれた」、「困っても日本語でいいよって言ってくれたし、英語ではこうだよって教えてくれた」からは、相互に歩み寄り理解しようと協力する姿が伺える。同時に、あまり会話が弾まなかったと記載した生徒もいた。オンラインの参加者は、「みんな楽しそうな表情をしていた」、「みんな笑顔で英語が出来なくてもジェスチャーで伝えようとしていた」など、参加者が楽しむ様子を観察し、「自分も対面にすればよかった」と後悔する声もあった。ICT機器の問題により配信の音が聞き取りにくいなどの問題もあった。

「クラス交流」については各教室でのクラス交流の内容を表3に示し、高校1年生・2年生・3年生と留学生のローテーションのしくみを表4に提示した。各教室における「クラス交流」では、まず「高校生から自国文化の紹介」として高校生から日本の茶道などについての文化を英語で紹介した。次に、「留学生によるプレゼンテーションなど」の時間を設けた。A. “Glocal Internship”(「グローバル・インターンシップ」)受講生は、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」を考案し実際にインタラクションを起こすアクティビティやゲームを行った。高校生は積極的に参加し、双方が楽しむ様子が見て取れた。B. “Japanese Society and Gender Issues”(「日本社会とジェンダー」)受講生が参加したクラスでは、留学生と高校生の双方からジェンダーに関する質問をし合った。

アンケートからは、「海外の人の雰囲気を知れたり、英語とかの発音も実際しゃべっている人の話を聞いて勉強になった」、「質問したりされたり文化を共有することができた」、「実際にクラスメイトや留学生の方の発表を聴くことができ、学ぶこともあったので対面で参加できてよかった」、「質問やゲームが楽しかった」、「留学生のプレゼンが参加型ですごくおもしろかった」、「大学生の方がされていたプレゼンから自分の探求に活かせるようなパフォーマンスを学ぶことができた」などからは、留学生が授業の実習として実践した異文化間インタラクションを起こすアクティビティに参加して留学生と関わる場を持ち新たな学びを得たことが分かる。また、「ジェンダーについて深く話し合うことができた」から、ジェンダーについて大学生と一緒に考える場を持てたことが伺える。「普段聞くことが出来ない留学生達の母国の様子をネイティブの発音で目の前で見たり聞いたり出来た」、「アドリブでの会話ができなかった」、「もう少し発表者に対して反応や質問を積極的にするべきだと思った」からは、留学生と接する新しい容赦のない現場体験から、その場で対応できる力をつけたいとの強い気持ちが読み取れる。

表 3. クラス交流（各 HR 教室）Classroom Activities（英語・日本語）

<1st Round 1 ラウンド>	
(1) 高校生から自国文化の紹介（15 分）[12:00-12:15]	
Introduction of Japanese Culture (High School Students)	
(2) 留学生によるプレゼンテーション・ゲーム（15 分）[12:15-12:30]	
Presentation by Hiroshima University Students	
<2nd Round 2 ラウンド>	
(1) 留学生によるプレゼンテーション・ゲーム（15 分）[12:35-12:50]	
Presentation by Hiroshima University Students	



表 4. プレゼンテーション・スケジュール（各クラスにおける高校生と留学生の研修）

Class	1 (1 年 1 組)	2 (2 年 1 組)	3 (3 年 1 組)	4 (1 年 2 組)	5 (2 年 2 組)	6 (3 年 2 組)
12:15-12:30 第 1 ラウンド	Internship Group 1	Internship Group 2	Internship Group 3	Gender Group 1&2	Gender Group 3&4	Gender Group 5
12:35-12:50 第 2 ラウンド	Gender Group 1&2	Gender Group 3&4	Gender Group 5	Internship Group 1	Internship Group 2	Internship Group 3

「街歩きガイドツアー」では、「全体会よりもたくさんのお話をすることができた」、「全体会とクラス交流を通して聞けなかった質問をすることが出来たし仲も深まったと思う」、「一番広大留学生と話す機会があった」、「自分の将来についても話すことが出来た」、「お別れの時に留学生も私たちも悲しんだ」から、小さいグループで街を一緒に歩いて紹介するツアーは、高校生と留学生と会話が生まれやすい環境であることが分かる。「吉舎のいい所などを紹介することが出来た」、「日本の文化についてとても興味を持ってくれていて色々な話題で会話が盛り上がって楽しかった」は、日本の地域の歴史や文化の紹介が双方のつながりを高める教育現場となる可能性を示唆している。「英語が通じるか不安だったけど、片言英語でも通じだし、「英語上手」と言ってくれた」、「日本語ではあったけど、いろいろ話すことができた」から、英語に限定されないコミュニケーションのあり方や少しでも話してみる大切さを感じていることが分かる。「日本語でしか話せなかった」ことを残念だと捉えた生徒もいた。「自分から発表する所以外で、ここはこうだよっていうのが出来た」は、現場で臨機応変に対応できたことの喜びである。オンラインで教室で観察した高校生は、「日本語の意味を教えていて楽しそう」、「頑張って英語で説明していた」、「みんなが楽しそうに町を紹介しており、魅力が伝わったのではないかと思った」など、現場の楽しい雰囲気を感じ取っている。全体会と同様に、「実際に参加すればよかったなあと後悔した」のコメントがあった。

次に、2022 年度の吉舎おもてなしプランの目標である「多様性を認め合い、自分と他者の心理的距離感を縮めようとする」の目標達成、「来年度に向けて改善したほうがよいと思うこと」、「大学生へのメッセージ」の 3 点に関する回答について述べる。「今までにない体験でした」、「外国の方が笑顔で僕の名前を読んでくださった」、「コロナ禍で外国の方とお会いするのが難しい中、おもてなしプランで

外国の方とお話ができる機会が設けられていたことにほんとに感謝しかないなと思いました」から、コロナ禍で多国籍の留学生と対面で会えたことへの感動が伺える。「英語で話すのが難しくてなかなか言えない。たくさん日本語で話そうとしてくれて、とても上手で驚いた」、「もう少し英語に関心を持って授業を受けようと思った」、「留学生が話している内容は理解できるのにそれに英語ですぐ返せなかったのがめっちゃ悔しかったし、英語の専門学校に行くのに情けなかった」、「会話できるように頑張る」、「世界の英語を知ることができて嬉しい」、から現場で容赦ない英語で話しかけられた体験が学習の動機づけとなるとともに、留学生との人としての関りから刺激を受けていることが分かる。

「街歩きで英語苦手ながらも T さんといっぱい話して完璧にできなくても通じ合えるんだなんて思って楽しかった」、「街歩きガイドツアーが一番印象に残りました」は、小グループでの行動により双方の心理的距離が縮められたと実感した生徒の感想であろう。「印象に残ったことは体育館での対面です。理由は、普段交流できないことをすることができたからです」、「全体会の時間がもっとあるとさらに楽しくなると思う」は、大学教員が企画進行した新しい異文化間インタラクションの体験をより多く持ちたいとの声である。オンライン参加の学生が、「昼休憩の購買で留学生と話せたので楽しかった」、「コミュニケーションが上手くできないのではないかと不安で、全体会も街歩きもオンラインで参加したことをとても後悔している」、「身振り手振りや単語だけでも、伝えたい気持ちがあればきっと伝わるはずだから、そうやって積極的に留学生と話すべきだった。今後海外の方と交流する機会があった時には、積極的に会話してみたい」と述べている。留学生との接触への躊躇や、他の対面の学生を観察して次への挑戦を決意する姿が見て取れる。「クラス交流でジェンダーについて話し合えたのがとても印象に残っている」は、高大接続の観点からも、多様性について高校生が大学生と話し学ぶ場を創る意義を示している。大学生へのメッセージとして、多くの生徒が「ありがとう」とお礼を述べていた。

総括

Castiglioni and Bennett (2018)は、文化的相違を抑制し、ホスト文化に合わせる一方的な適応を強要した場合、可能性を持つ価値が生かされないと論じている。文化的相違にアクセスしその相違を実体験する経験は異文化間接触の貴重な経験である。相互的な適応が“third culture”を生みコミュニケーションの場を作るが (Castiglioni and Bennett, *ibid.*; Bennett 2012), 本研究で提示した異文化間接触は、高校生と留学生が相手の文化を理解しようと歩み寄る空間となる“third culture”を体験する国際教育交流である。“Third culture”は、異なる文化が単に存在するのみでは生まれず、文化背景の異なるものが相互に適応しようとし共感する場で生まれるものであり、組織に新しい価値をもたらすと Bennett (2018: 236)は述べているが、高校生と留学生が共有した新しい空間と重なる。Bennett (2012)は、異文化に関する知識自体は異文化間能力ではなく、知識を生かすためにはその使用方法を知ることが必須であると指摘する。そのためには、異文化間インタラクションが生まれる空間で実体験することが必須となる。それが容易ではない現実を理解し、異文化間接触を実体験する空間を教育者が教育現場で作ることが求められる。

アンケート調査により、対面とオンラインに対しての高校生の見解を知ることができた。第一に、高校生は、コロナ禍で留学生と対面で関わったことを高く評価している。また、オンラインも対面がかなわない状況におけるツールとして評価している。筆者が高校に赴き実施したハイブリッド形式の異文化間能力育成研修では、現地の高校生と海外にいる留学生がオンラインでつながる体験となり、「吉舎

にいても海外の留学生とつながる」ことを実感している。カメラに向かい話すオンラインでは、話者が誰に向かって話しているのかが曖昧となり、相手への気持ちや共感を伝えるににくい。受け取る側も限定的にしか他者の様子が見えず相手の気持ちを感じ取りにくい。対面では相手が出すエネルギーやその人の周りとの関係性が見える。また、「正式な場」の前後や移動時間に緊張が解けた状態で高校生と留学生との貴重な対話が交わされる非公式の場が発生する。人としての温かい触れ合いは対面の何気ない場で生まれる。行事の終了後、名残惜しそうに廊下で留学生に話しかける高校生と応対する留学生、その会話から起こる笑い、最後の別れを言おうとバスに乗り込んだ留学生に近寄り話しかける高校生の姿は、形式的枠外で発生する「人」としてのつながりである。そこには自然な感情が表れている。

Bennet (2012) は、現実とは特殊な社会的・文化的文脈においてのみ自然に自覚するものであり、異文化体験とは意図的に自身の認識を再編成することであると言う。大学教員が教育的介入を行い、高校と協同で実施した本稿の国際教育交流は、*experiential/constructivist*（経験的/構成主義的）パラダイムで行われた教育実践である。教育的介入なしに留学生と日本の高校生との異文化間接触は簡単には実現しない（Tsunematsu 2022）現実を踏まえ、異文化を背景に持つ人との関りについて学生が主導的に考え、体験を通じて自身の異文化の認識を問うような場が求められる。留学生はホスト国の日本人々と関わることを切望し、高校生も体験を積むごとに世界との関りを実感している。中学生時から参加した生徒で、今回、高校生として参加し、自ら質問できるようになったと振り返る声があった。筆者が述べた「容赦のない本物の体験・準備のない世界」を生徒に体験させたいとの高校の先生方の想いに応えたい。生徒が自らの力で異文化間接触の実体験から何かを学び取り、勇気ある第一歩を踏み出し成長を感じられる教育を目指す実践の一例として、高校生と留学生の国際教育交流について本稿で論じた。

参考文献

- Bennett, Milton. 2012. "Paradigmatic Assumptions and a Developmental Approach to Intercultural Learning." In *Student Learning Abroad: What Our Students are Learning, What They're Not, and What We Can Do About It*, edited by M. Vande Berg, R. M. Paige, and K. H. Lou, 90–114. Sterling: Stylus Publishing.
- Castiglioni, Ida, and Milton J. Bennett. 2018. "Building Capacity for Intercultural Citizenship." *Open Journal of Social Sciences* 6 (3): 229-241.
- Tsunematsu, Naomi. 2022. "Agency, Autonomy, and Power of International Students in Interactions with Local Society in Japan through an Experiential Learning Project." *COMPARE: A Journal of Comparative and International Education*. DOI.10.1080/03057925.2021.2017767.
- 恒松直美 (2020) 「高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦 –異文化理解教育推進プログラム『吉舎おもてなしプラン』国際交流–」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 18 号, pp.51-64.
- 恒松直美 (2021) 「国際教育交流における“Third Culture”–留学生の日本留学目的と高校生の異文化間能力をつなぐ–」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 19 号, pp.31-38.

謝辞

広島県立日彰館高等学校と地域の皆様に心より感謝の意を表します。